アフリカハンドブック

前　　編

400
22
JVA

日本青年海外協力隊事務局

国際協力事業団
受入月日 '84. 5. 24
登録No. 07528
400
22
JVA

まえがき

日本青年海外協力隊では，アフリカにおいてモロッコ，ケニア，タンザニアの各国に隊員を派遣している。東南アジアに比べるとアフリカはいろいろな点で未知である。隊員諸君がてっとり早くアフリカのアウトラインを把握し得るようここにハンドブックを作成することにした。

隊員たちは現地に２年間定着し生活するために行く。できるだけ生活する隊員たちの身になって作成したつもりではあるが，拙速を重んじて何かと至らぬ点もあることと思う。

これらの点は隊員諸君の報告等により，逐次改善してゆくこととしたい。

なお，このハンドブックは日本青年海外協力隊事務局員谷口稜の記述によるものであり，引用した図表等も同君の翻訳によるものである。

昭和44年１月１日

日本青年海外協力隊事務局長
篠　浦　公　夫

JICA LIBRARY
1051377[8]

アフリカ概説

歴史概観

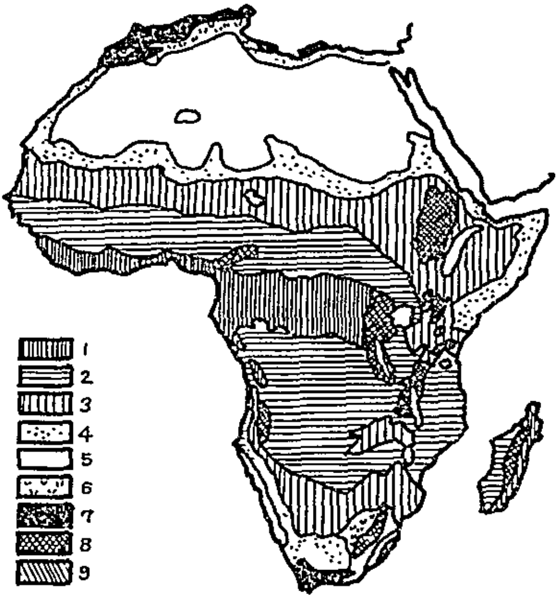
アフリカは広大である。暗黒の大陸と呼ばれることは最近なくなったものの，学問上の見地からは未知の分野が多い。歴史は特に未知の領域に入る。けれどもそのことは，アフリカに歴史が欠如したことではない。先史時代から絶えることなく人類が存続してきたのは，史実として今日，誰もが認める所である。

現在では最古とされる人骨が，東アフリカで，あるいは南アフリカで発見されたことは，わたしたちのよく知っていることである。

そして，第二次大戦以後の，反植民地運動，民族主義運動の有力なにない手として，アフリカの諸国が，一役を買ったことも，わたしたちのよく知っていることである。

歴史を一口に語ることは，容易ではない。ここではアフリカの歴史を考える時の基本的な知識について触れておきたい。

「一年中長い乾期と雨期が続くステップとサバンナの地帯では，狩猟民，飼牛民，穀物栽培民が遠い昔から住んでいた。といっても一つの生業形態から他の形態への直接的な移行があったかどうか確かめるすべはない。この地方はきわめて流動性に富んでいて，次々に文化の借用，交換，政治的，軍事的な試みに適した地帯であった。」アンリ・ラ



第1図　アフリカの気候と植物

1. 赤道地帯　2. 熱帯（湿潤サバンナ）　3. 合歓木林および茨樹熱帯　4. 砂漠性ステップ　5. 砂漠　6. 北アフリカのアフリカハネガヤ草原および南アフリカ平原　7. 地中海性植物地帯　8. 高山植物　9. 南アフリカの亜熱帯林

文庫クセジュ「黒いアフリカの歴史」：アンリラブレ著山口昌男訳，白水社 p.10 から

ブレ著『黒いアフリカの歴史』（文庫クセジュ：山口昌男 訳）には，アフリカの広範な部分を占めるサバンナについてこう述べた。歴史認識を支える基本的な知識の一つとして知っておかれるとよい。

「考古学者，人類学者，先史学者は，ベルベル地方の大部分に散住する黒色人種のほとんどが，数千年の間白色人種と交渉を持ち，間接的な方法で，当時盛んに発展しつつあった地中海文明の恩恵を蒙ってきたと説いている。そのため白色人種と黒色人種の間には混血が行なわれ，それは後になるにしたがってしだいに著しくなってきていた。

西および中央サハラ砂漠では，ベルベル族，後には外から来たアラブ人も絶えざる圧迫を彼らの隣人のニグロに及ぼしていた。

ニグロは白色人種によってしだいに高原地帯およびアトラス山脈の支脈地方から南方へ押しやられるに至った。一方，白色人種もまた，九世紀から十世紀にかけてセネガル川およびニジェール川中流地帯およびチャド盆地に進出している。以前は肥沃であった広大な地帯の乾燥化によって拍車をかけられたこの新しい局面は，さらに新しい混合をひき起こした。人類学者たちは今日熱帯アフリカにおけるその痕跡を証明している。

一方，非常に早くから始まっていた交易も大幅にその混血を促進するのに役立った。」（黒いアフリカの歴史：アンリ・ラブレ著）

事実そのとおりである。アフリカを一つのものとして解してはいけない。現在日本青年海外協力隊員が，モロッコ，ケニア，タンザニアに派遣されているが，それぞれが異なった雰囲気にある。特に，北アフリカ

（モロッコ）社会と，東アフリカ（ケニア，タンザニア）社会の相違はとてもこれが一つのアフリカとは解することはできない。

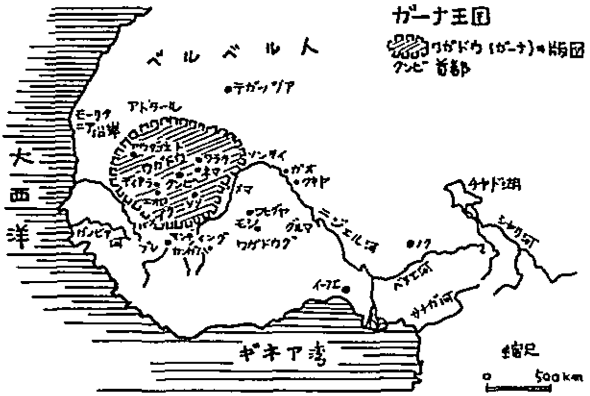
そもそも，一つのイメージでとらえることが無理なのである。アンリ・ラブレの指摘するように，発展の形態が歴史的に異なる。

端的に言えば，部族の数だけの歴史がアフリカにあると考えてよい。それを総合した「アフリカ史」はいまだ完成していない。それでいて詳しい歴史の記述がある所は，主として西アフリカと呼ばれる地域の，ガーナ帝国，マリ帝国，チンブクツを中心とするチャド周辺ガオのハウサ族の都市国家群，ボルヌ帝国のモシ族の国家等のかつて存在した所である。

概してアフリカ史と言われるものの，通史の大半は，これらの西アフリカの歴史に準拠していることが多い。

「ガーナ国は，4世紀にベルベル人がつくったものらしい。少なくとも，『タリフ・エツ・スーダン』によればそうである。この著作は，最初の数世紀に白人の王朝があったと言っている。もっとも，紀元10世紀に先立つはるか以前から，すでに黒人の王朝が支配していた。これはミセ王朝といい，サラコレ族に属していた。アフリカの伝承も，ワガドウという名で，この国の記憶をとどめている。

エル・ベクリは首都について完璧な記述を残している。首都の一部は王宮のある街区で，そこには王宮のほか，アカシア材を骨組みに使った貴顕たちの石造りの家や，さらに丸い屋根をした土の小屋が立ちなら



び，全体が城壁でかこまれていた。その横の聖なる森には，司祭たちが住んでいた。そこには偶像や牢獄や，それから王族の墓があった。この墓は木のドームで，君主の遺体といっしょに，生前使っていた品々や，殉死する料理番，木工師などをそのなかに入れた。それから墓をしめ，土でおおうのであった。

イスラム教徒が住んでいる商業地区は，かなり離れたところにあった。そこには市場としてのモスクがあって，学者たちもそこで教えていた。近くにはたくさんの井戸があり，飲料水の供給と菜園の灌漑をしていた。ガーナの場所がバマコの北330キロに位するホド地方のクンビ・サレであることはほぼ確実である。1914年にボネル・ド・メズイエールが最初の調査をして以来，ここでは数次にわたって発掘がおこなわれ

た。……」（J・シュレ・カナール著『黒いアフリカ史』理論社刊 P.146）

詳しい歴史の記述があるのはこのとおり，西方の歴史である。西アフリカ諸国，そして，特に北アフリカ諸国には，たしかに歴史があった。記録された記述があり，遺跡がある。さらには東アフリカの沿岸地方にも，この種の記述と遺跡は枚挙にいとまがない。歴史研究は端緒についたばかりである。

諸君が，さらに忘れてならないことは，一見冴えない遊牧民にも，またそれなりの歴史があるということである。記述はなく，遺跡とてなく，したがって歴史が無いと，従来は考えられていたものの……人類が棲息し，存在し来たったことは，それ自体が歴史ではないか。

「ワシの父ギニヤガティがハノダ（人名）やギシニダ（人名）といっしょに，ドンゴベシ（地名）へうつったとき，ギダモーサ（人名）はムブルー（地名）からすでにドンゴベシへきていた。ギダモーサはキンゲ・エツ〔スワヒリ語「わたしたちの族長」〕であった。それから，ワシがちょうど，ダウイタ〔15～16才〕のときドイツ人はダルマジェガ（一支族）の老人たちをとらえた。まえからギダモーサのガドウェーダ〔ダルマジェガのクスリをつくるための牛牧儀礼〕に，たくさんの部族がやってきた。イラク族とニヤトウール族もやってきた。彼らがドイツ人に言った。『ギダモーサら，ダルマジェガのブワナ・ムガンガ〔スワヒリ語「医術師」〕がクスリをつくったら，ドイツ人の鉄砲は水がかかったみたいになる』そこでドイツ人は，これをほっておいては，ぐあいがわるい

とかんがえた。ドイツ人はギダモーサの村に，マサイ族やイラク族を連れて入り，かれのウシやそのほか村の者のウシをとりあげた。イラク族はウシ皮のたてと，槍を２本もってやってきた。ダトーガはみんな森の中へにげた。ワシも森へ行って，３日間寝た。しかし，ギダモーサ，ハノダ，ギシニダ，それからオタドウ(人名)，かれの子供３人，ジャラディの父，マパンディ（人名)，ギダモーサの子４人，ギチヤンギヤ（人名)，ゴセマ（人名）みんなドイツ人につかまった。

ドイツ人は，ギダモーサを最初モシ（地名）へつれていって，一年間つかまえていた。そのあとムブルーで三ヵ月，その翌日に，ドンゴベシで首をしめた。ほかの者も首をしめられた。ハノダ，ギダモースタ（人名）も首をしめられた。ワシの父，ギニヤガティは，ウシのメスを２頭，大きいのをイラク族の族長にやってかくれたので，たすかった。そのころ村長はイラクであった。

いずれにしても，ドイツ植民地政府の意図は，ダトーガ社会のみならず近隣部族のあいだでも，魔術的な力をもつと信ぜられていた。ダルマジェカの中心人物たちをのぞき，ダトーガの戦闘組織を骨ぬきにしようとしたものであるとかんがえてよい。……」(人間・人類学的研究：中央論社刊：「ダトーガ族の地域集団」著者・富川盛道氏・東京外大教授)

アフリカ全域に，共通する生活様式は遊牧である。一見冴えない未開の典型にすら，外来者の目に映る彼らにも，語り伝えられる，このような歴史がある。

アフリカへ出かける諸君が接触する人々は，十人中十人が部族の意識

と伝統を自覚している。都会であれ地方であれ，その現象に諸君は気付くであろう。

部族という言葉自体が，たいへん未開な原始的な住人を連想させる。彼らの生活は事実貧しい。だが，間違ってはいけないのは，そのことと精神世界とは相関ではないということだ。わたしたちが，いわゆる「歴史」で習得したものとは，いささか，形態も発展も異った，勝手の違うものではあるが，一口に「未開だ」「遅れている」では片づけられない背景の下に人々が生きてきたことを承知されたい。

それが，アフリカの歴史の特色の一つである。基本的な認識の一つでもある。

参考文献紹介（入手しやすいもの）

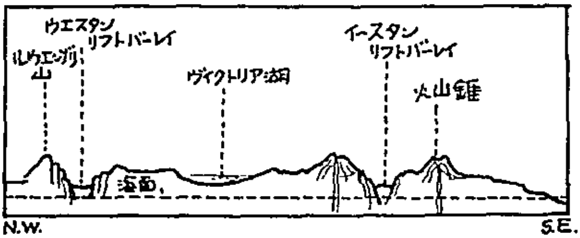
アフリカ史案内　バズル・ディヴィドソン著　内山敏訳（岩波新書）
アフリカ史の曙　R・オリーバー著（岩波新書）
黒いアフリカの歴史　ラブレ著　山口昌男訳（文庫クセジュ）
アジア・アフリカ問題研究入門　岡倉古志郎著（岩波新書）
アフリカの創世神話　阿部年晴著（紀国屋新書）
人類の祖先を探る　今西錦司著（現代新書）

地 理 概 観

まずはアフリカ大陸の大きさを，大ざっぱに把えるために，次図を参考とされたい。インドと，イングランドが，かくの如くに内包される面積の大陸であることを知っておかれるといい。

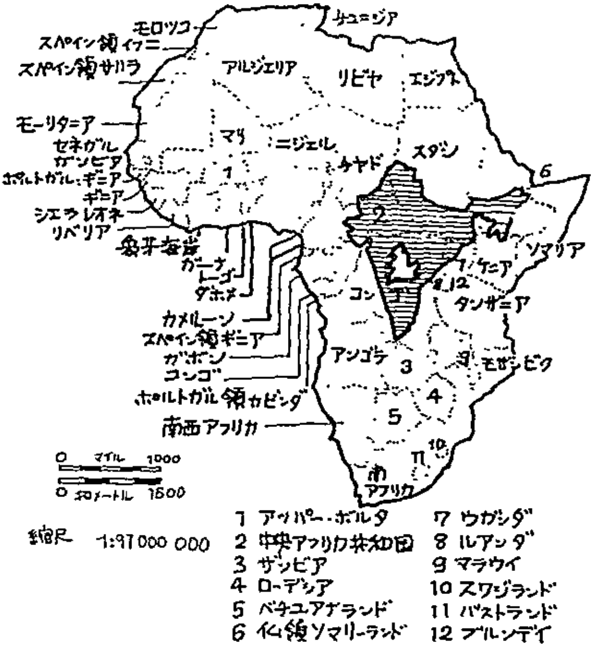
アフリカ大陸は table land とも言われている。横断面が，大まかに言えば，次のようになる特色を指して言うのである。

海岸部と内陸部の気候の相違の原因として考えられている。アフリカを形成する地層は古い。



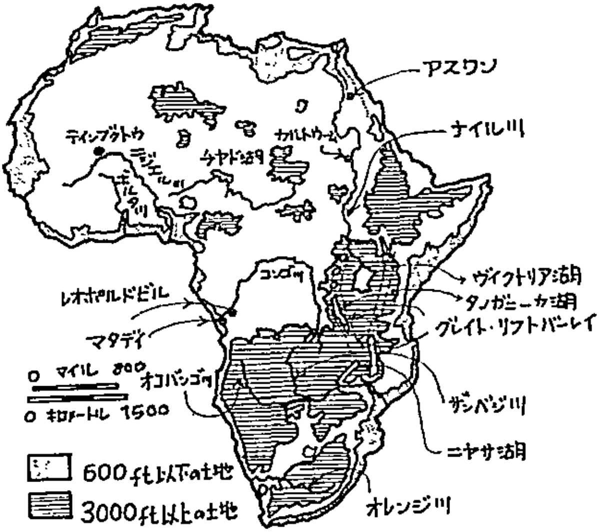
東アフリカ大陸横断図

The Lands and Peoples of East ofica by G. M. Hickman and W. H G. Dickins p. 52 より



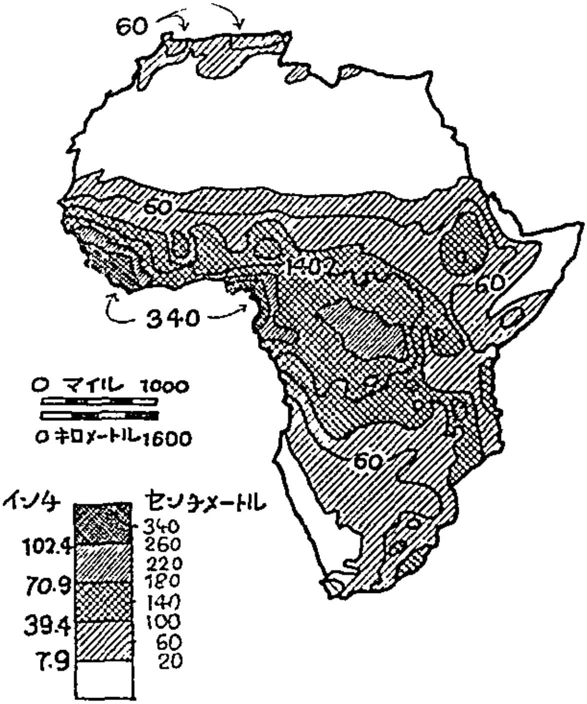
イングランドおよびウエールス，インド（カシミールを除く）と比べてみたアフリカ大陸

The Geography of African Affairs
by Paul Fordham より



地形・流域略図（主要なもの）

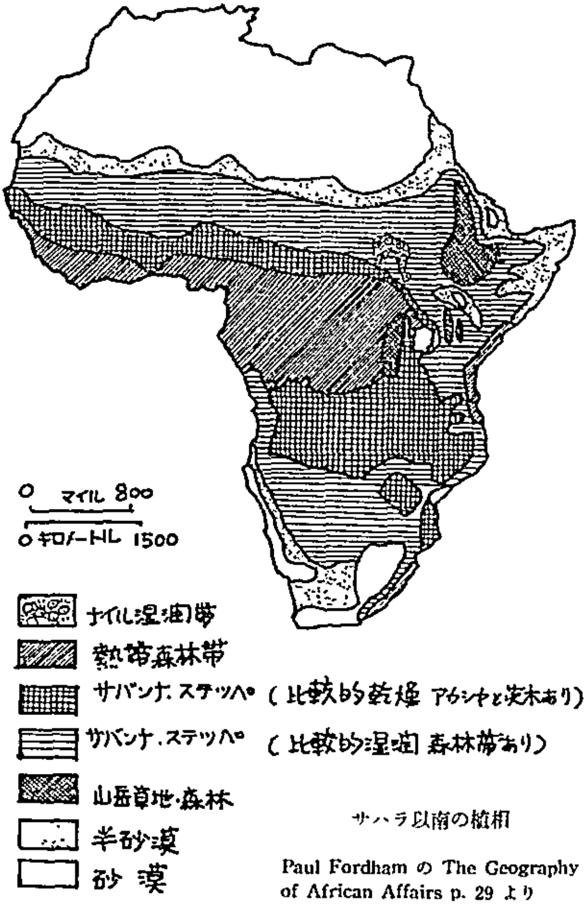
Paul Fordham の The Geography of African Affairs p 21 から



アフリカ全土年間降雨量分布

Paul Fordham の The Geography of African Affairs p. 24 から

年間の降雨量を大陸全般について調べれば，次図の如くになる。1インチは約2.5cmである。

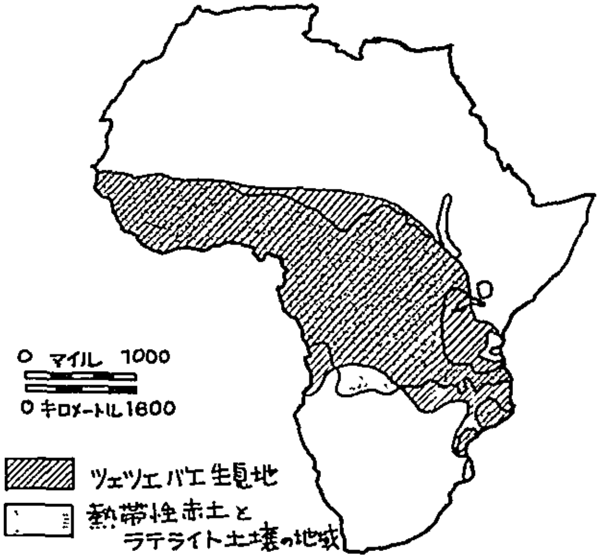


サハラ以南の植相

Paul Fordham の The Geography of African Affairs p. 29 より

年間降雨量と密接に関連するのは植相である。

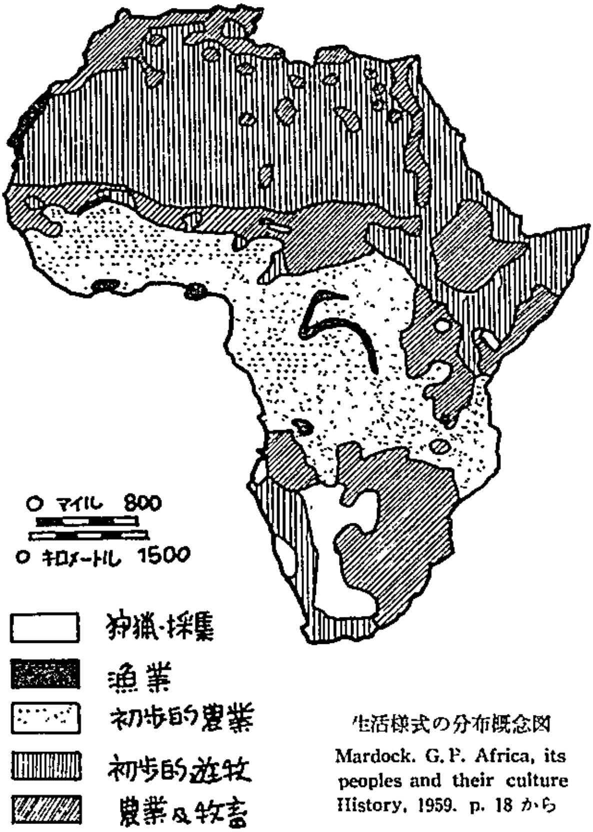
アフリカの赤土帯とツエツエばえの分布を概略説明するのが次図である。



熱帯土壌とツエツエバエ分布概図

Paul Fordham の The Geography of African Affairs p. 25 より

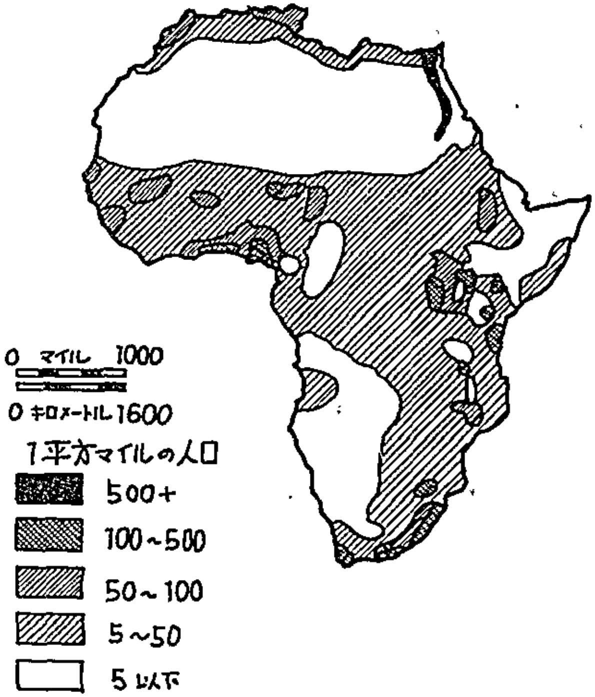
これらの土地に住む人の生活様式は次図のように大別される。大別であるから area 内がすべて一つの生活様式で固塗されるわけではない。



生活様式の分布概念図

Mardock. G. F. Africa, its peoples and their culture History, 1959. p. 18 から

一マイル（約1.61km）四方についての人口密度が次図である。粗であること，これはアフリカ大陸の一つの特色である。

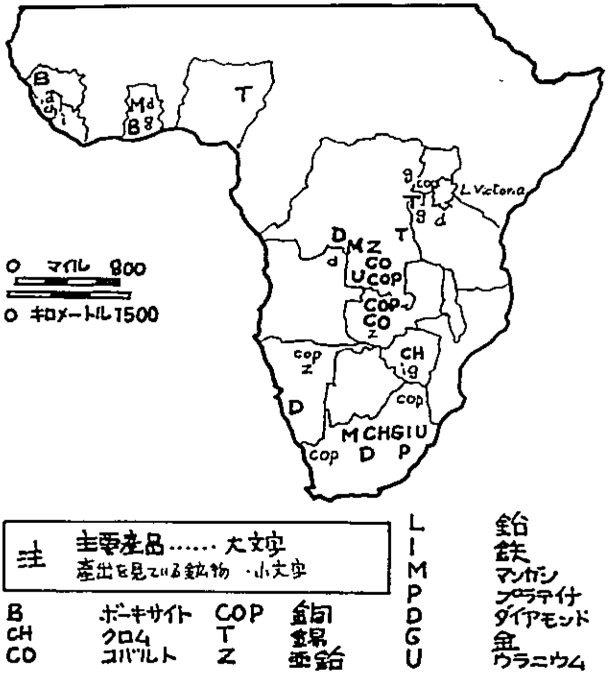


人口密度概念図

Paul Fordham: The Geography of African Affairs p. 76 から

未開発と言われるものの，鉱産資源の開発はかなり進展していて，参考図の域を出ないが，次図が，その分布である。

コンゴにおけるかつての紛争にこれらの鉱物資源が一役をかったことは覚えている人も多いであろう。

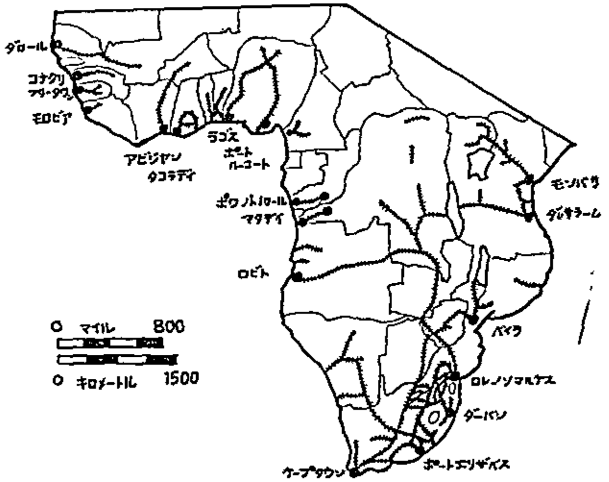


鉱産物資源分布概図

Paul Fordham; The Geography of African Affairs p. 80 から

主な交通手段，主要な港と主要鉄道を次図によって示すことができる。鉄道網もまた粗である。

だが，自動車道路は密で鉄道をりょうがしている。いずれもヨーロッパ人が開発建設したものである。アフリカ人自身のトランスポーテーションはまったく無かったわけではない。



鉄道概図及主要港略図

Paul Fordham; The Geography of African Affairs p. 81 から

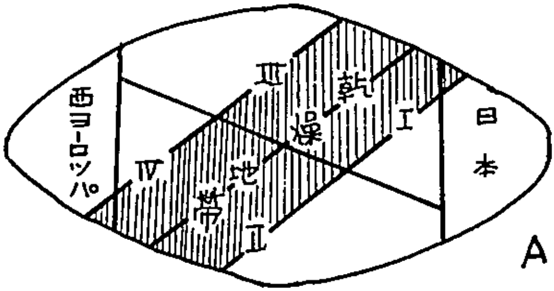
非常に大まかであるがアフリカ大陸のアウトラインを地理的に説明した。基本的な認識として，以上のことを知っておかれるとよい。

参考文献（入手しやすいもの）

アフリカ大陸	今西　錦司著（築摩新書）
アジアの見方	岩本　　忍著（現代新書）
アフリカ	宍戸　　寛著（現代教養文庫）
アフリカ読本	西野照太郎著（時事新書）
鎖を断つアフリカ	西野照太郎著（岩波新書）

文 化 概 観

文化と一口に言うが，その内容が難しい。岩波の国語辞典にはこうある。「①世の中が開けて生活水準が高まっている状態。文明開化　②人類の理想を実現して行く精神の活動，技術を通して自然を人間の生活目的に役立てて行く過程で形作られた，生活様式，およびそれに関する表現。」

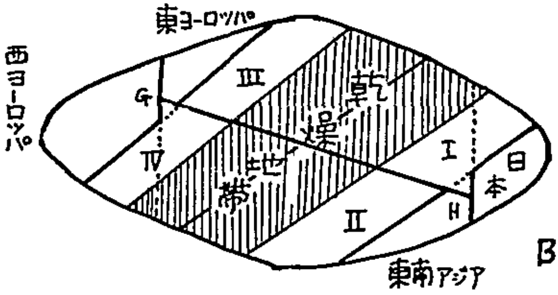


A図

ここで言う文化とは，後者②のことである。「生活様式」として把握する。

故に生活様式について，若干の記述を試みよう。図の⑧が，大まかなアフリカの文化の実態を示すと考えてよい。大勢を占めるのは原始的農耕と，原始的な遊牧である。

梅棹忠夫氏はその著『文明の生態史観』において大きく，第一地域と第二地域とに分けた。彼の説によれば，「まず東洋とか西洋とかいうわけ方は，ナンセンスである。文化伝播の起源によってわける系譜論の立場をとって，共同体の生活様式のデザインを問題にする機能論の立場を



B図

A・B図とも『文明の生態史観』梅棹忠夫著（中央公論社刊）から

とる。するとアジア，ヨーロッパ，北アフリカをふくむ旧世界は，二つのカテゴリーにわけることができる。一つは西ヨーロッパおよび日本をふくむところの，第一地域である。もう一つは，その間にはさまれた全大陸である。

第一地域は，歴史の型からいえば，塞外野蛮の民としてスタートし，第二地域からの文明を導入し，のちに封建制，絶対主義，ブルジョア革命をへて，現代は資本主義による高度の近代文明をもつ地域である。第二地域は，もともと古代文明はすべてこの地域に発生しながら，封建制を発展させることなく，その後巨大な専制帝国をつくり，その矛盾になやみ，おおくは第一地域諸国の植民地ないしは半植民地となり，最近にいたってようやく，数段階の革命をへながらあたらしい近代化の道をたどろうとしている地域である。」。

東南アジアとアフリカは，この第二地域に入る。東南アジアと似て，アフリカの諸国において一つの特色は民族にある。国ごとに民族が違う。言語も，風俗習慣も宗教も異なった，系統のちがう種々さまざまな民族が，たがいに共存しているのが，アフリカの大づかみな特色の一つである。東南アジアとは異なって，アフリカは，日本の文化と親近を思わせる要素は無い。

類似したものを発見しても，同質，等質なものの発見は困難である。

衣は総体的に貧しい。食，これは変容の著しい側面を有する。

例えば，マサイ族は，乳と血のみを食する，というふうに紹介されるが，現実に，彼らの多数が，トウモロコシを食している。たとえば都市

ではインド，アラブの食生活上の慣習が大きく影響してきていて，在来の伝統的な食生活を厳密に認識することは困難である。

同様に都市で見受ける限り，住居はなかなかしゃれたものだが，設計者，家主がインド人であったりする。中に一歩踏入れると家財は貧しかったり，一人あたりの家屋面積は狭かったりする。

他方，牛の糞と粘土をこねあわせて造った，一見貧しい居住性の悪いような家が，サバンナには適した，居住形態であったりする。

総じて，都市においては，生活様式の端的な側面，衣食住について伝統的な様式を認識することはなかなか困難である。

地方においては，伝統的な様式を至る所に発見することができる。

それは在来の，伝統的部族社会の生活様式，文化体系と密接に関連している。

言語，宗教，芸術とうについても同様のことが言える。

以上のことを 基本的な 認識として アフリカの文化を 考えてみるとよい。

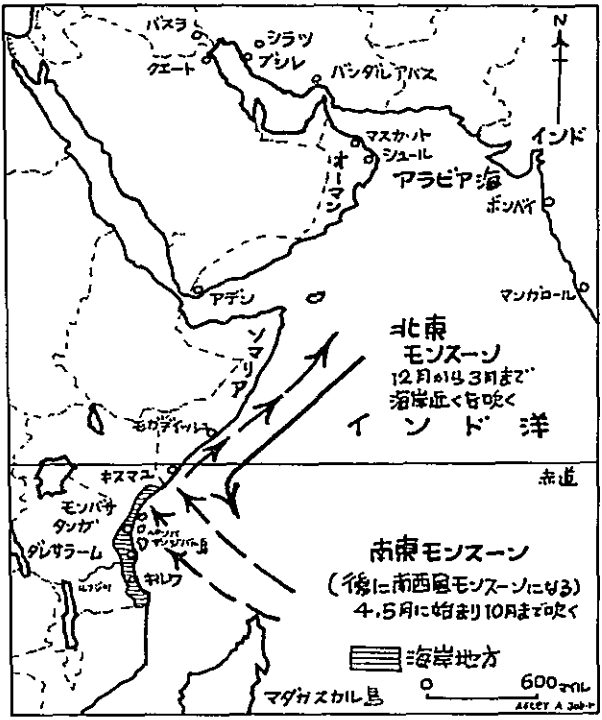
参考文献（入手しやすいもの）

シュヴァイノァーとの七年間　高橋　功著（旺文社文庫）
ゴリラとピグミーの森　伊谷純一郎著（岩波新書）
アラビアのロレンス　中野　好夫著（岩波新書）
イスラーム　蒲生　礼一著（岩波新書）
黒いアフリカの宗教　デシャン著山口昌男訳（文庫クセジュ）
アフリカの民族と文化　ドューズ・ホーム著川田順造・（文庫クセジュ）
日本人・牛切りショー　谷口　穣著（毎日新聞社）

東アフリカ事情
（ケニア，タンザニア，ウガンダ）

百聞は一見に如かずといい，スワヒリ語でも kusikia si kuona (聞くことは見ることではない。)と言う。

せめて，図を駆使してタンザニアをのぞいて見ることにしよう。原則として図を見て考えることにして欲しい。



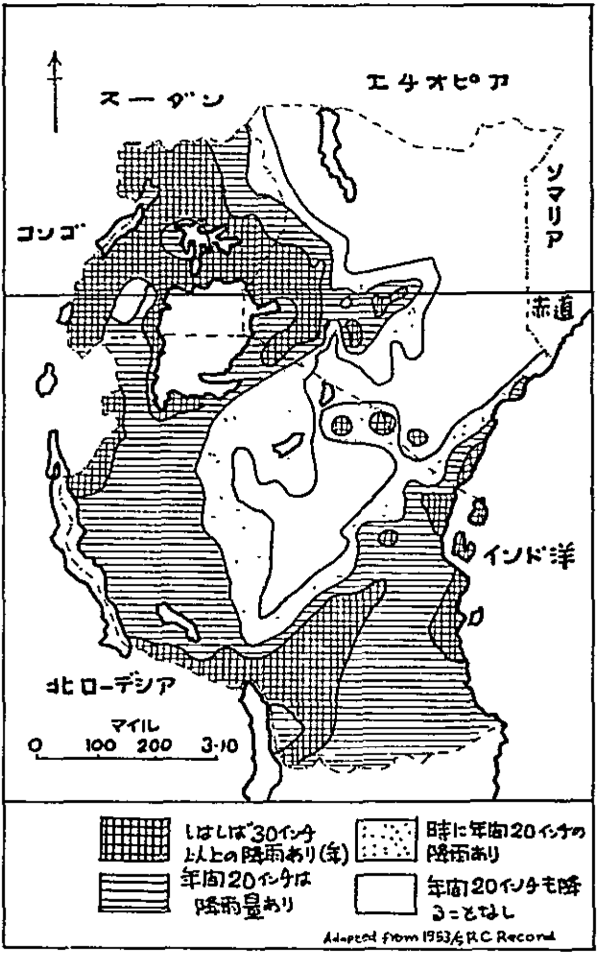
東アフリカ海岸部の貿易風

The Lands & Peoples of East Africa by Hickman and Dickins p 62 から

○東アフリカの海岸部には，昔からいろいろの都市が繁栄していた。交易で栄えた町々である。商人たちはインドからやってきた。貿易風にのってやってきた。

意外な昔から，東アフリカの都市が繁栄したのは，実に，この貿易風の故である。

東アフリカの気候に影響しているのもこの貿易風である。



東アフリカの年間降雨量概図
The Lands & Peoples of East Africa p 14 から

○概して言うならば，東アフリカは乾燥した地域である。全域的に多いのは，サバンナの景観である。乾いているというのは，砂漠のことではない。サバンナのことである。

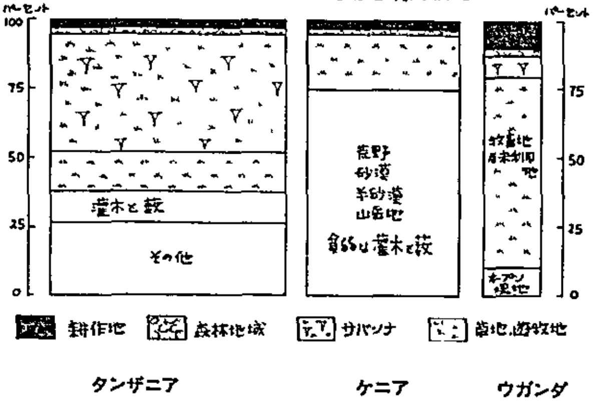
雨は降るのである。

ただし雨は雨季にのみ降る。乾季にはまったく降らない。しかも雨量には地域差がある。

○水を確保することができたなら，東アフリカ三カ国の農耕適地はさらに拡がるに違いない。

大きな課題の，その一つはわずかながらも降る雨を irrigation の開発により，土地のために確保することである。

東アフリカ三ヵ国における土地利用状況



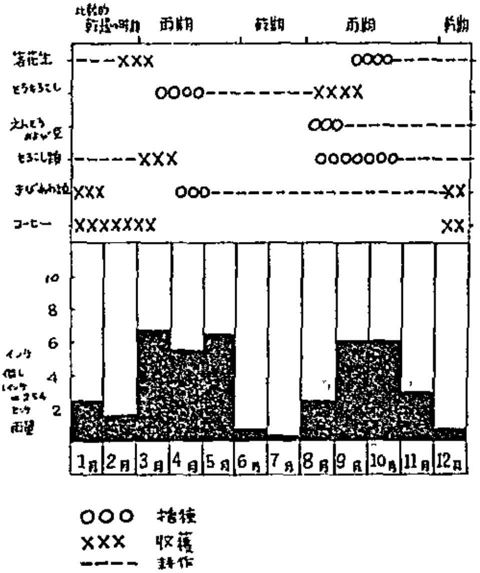
The Lands & Peoples of East Africa p. 174 から

参考	人　口	面　積	1km²に
ケ ニ ア	8,676,000人	582,646km²	15人
ウ ガ ン ダ	6,845,000	243,410	29
タ ン ザ ニ ア	9,399,000	987,061	10

⑨農作物の貧しさ，品目の乏しさも，これらの気候条件と関連して考えないわけにはゆかない。

タンザニアは湖沼の国，と言われながら，水を農耕に十分に供給していないことの反映である。次図をよく考察されたい。

海岸部，湖岸部（特にヴィクトリア湖畔）は年中雨が降る。降雨量の差が，作物の地域差となって現われていることは，自然であろう。



ウガンダ，西方アンコーレのルゴロゴロ・シェマにおける栽培作物の現況
The Lands & Peoples of East Africa by Hickman and Dickins p. 10 から

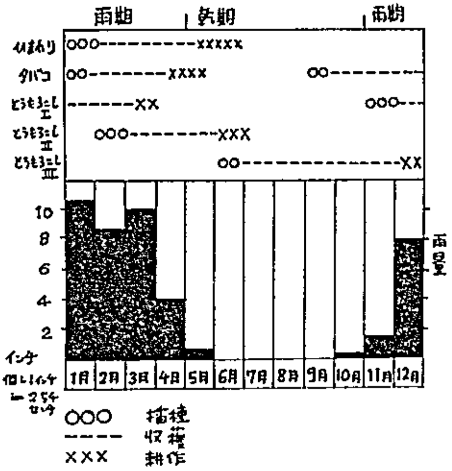
○東アフリカの代表的な，一次産品にコーヒーがある。もとより，全域的に収獲があるわけではない。図で見られるコーヒーの産地は，同時に，他の作物もよくとれる豊かな土地である。

東アフリカで，最近重点的にとりあげている作物の一つは綿花である。

図で見られる産物の何れもが，他の各国とシェアを競う品々であ

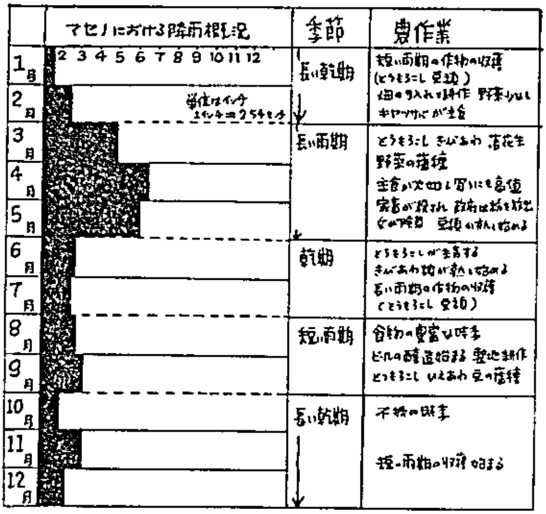
ることに一つの問題がある。他の各国が似たような国々であることに問題がある。

さて，重複するが，もう一度，今の産物の産出地域とにらみ合わせて降雨量と，雨の降る型を比較考察して見よう。



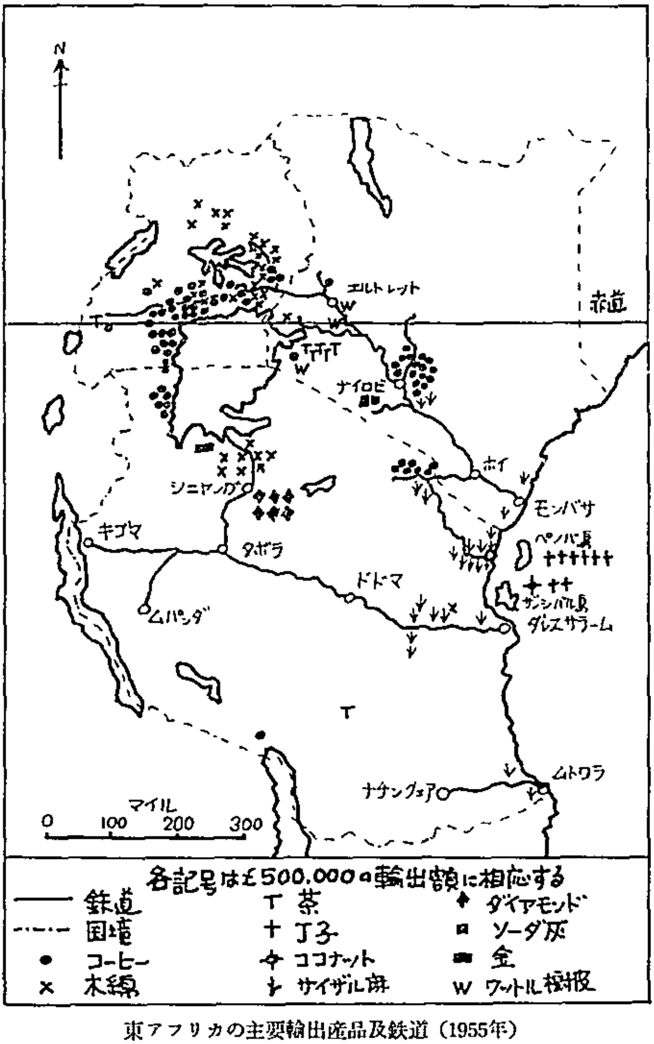
ソンゲア地方（タンザニア南部）における栽培作物の現況

The Lands & Peoples of East Africa by Hickman and Dickins p. 11 から

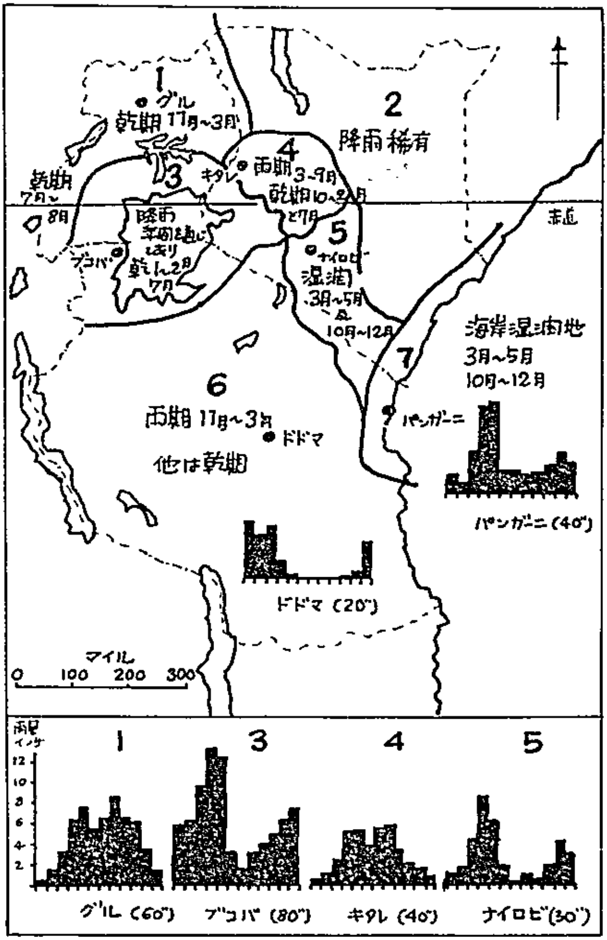


ニヤンザにおける季節による農作業概況

The Lands & Peoples of East Africa by Hickman and Dickins p. 111 から

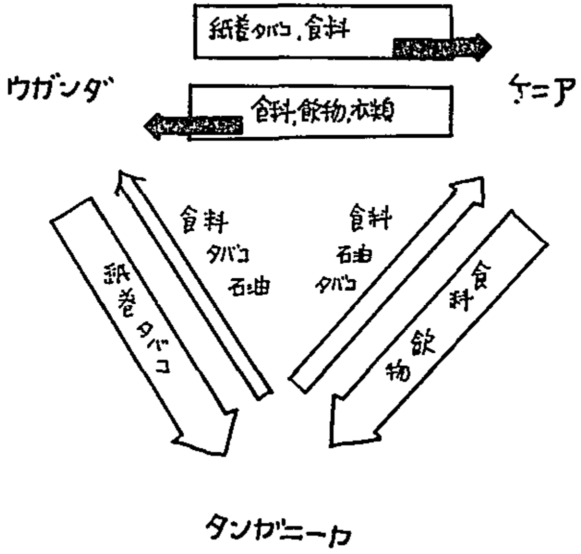


東アフリカの主要輸出産品及鉄道（1955年）
The Lands & Peoples of East Africa p 182 から



降 雨 概 況 と 型

The Lands & Peoples of East Africa by Hickman and Dickins p. 8 から



東アフリカにおける交易状態（1955年）
矢の大きさは割合を示す

The Lands & Peoples of East Africa by Hickman and Dickins p. 193 から

内陸への白人の進出を妨げたのはどうもうな土人たちではない。アフリカの自然である。

ここ東アフリカの場合は，ツエツエ・バエであった。

現在もなお，ツエツエ・バエは存在し，猛威をふるっている。

この図は，多少オーバーで，現実にその存在面積は狭まった。

○ツエツエ・バエの領域と，人間の居住する領域との相関を，前の図とにらみ合わせて読みとって欲しい。

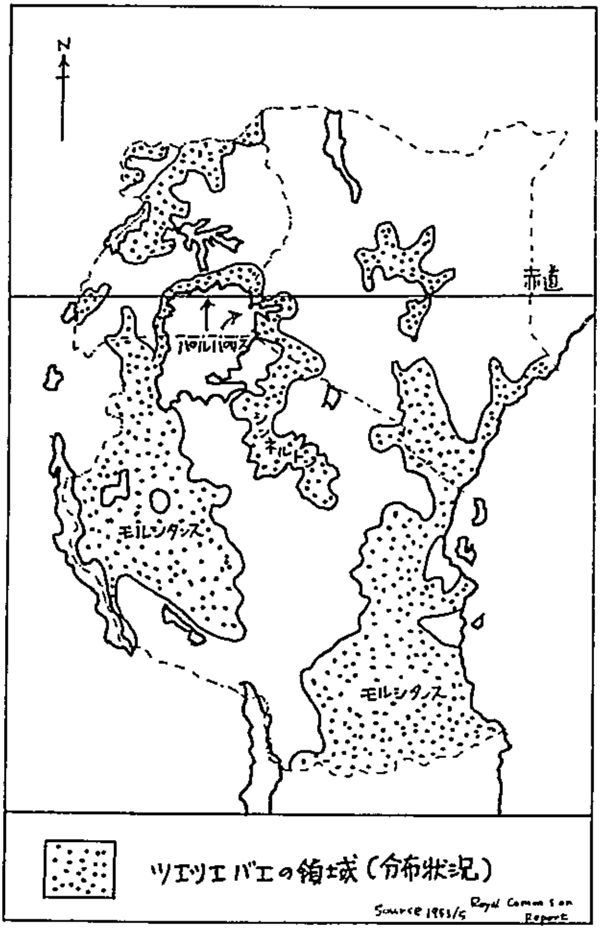
言うまでもないことだが，ツエツエ・バエの多い所には，人間は住まなかった。アフリカ社会を理解するために，アフリカの自然を前提として理解することは重要である。

○東アフリカにも，多くの部族が存在する。不特定数の人口の生活体系が，ある一つの特色を持つ，故に部族とも呼ばれる，と解していただいてよい。部族の容する人口は，例えばスクマ族の110万余から，500人弱のハツアピ族まで，多様である。西アフリカには，一つの部族を基礎にした王国の成立があったが，東アフリカには，はとんどなかったと言ってよい。

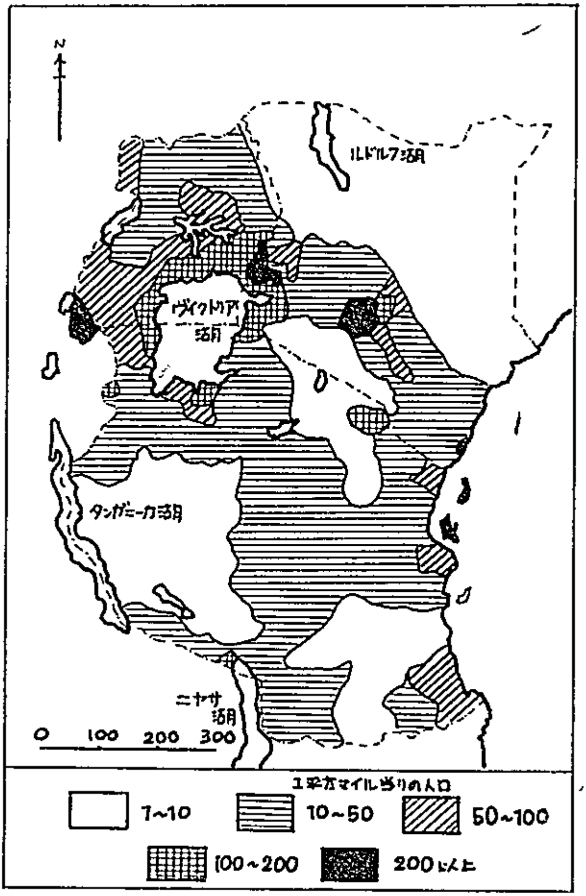
○数多くある部族の中に，よく知られているマサイ族がある。ケニアとタンザニアの国境を無視して存在し，その人口，およそ10万。しばしば，未開の典型とされるこの部族を若干紹介してみよう。

タンザニアに多いのは，バンソー系部族である。端的に言うと，鼻が広く，唇の厚い人々，がっちりとした体格の人々，がバンツー系黒人である。

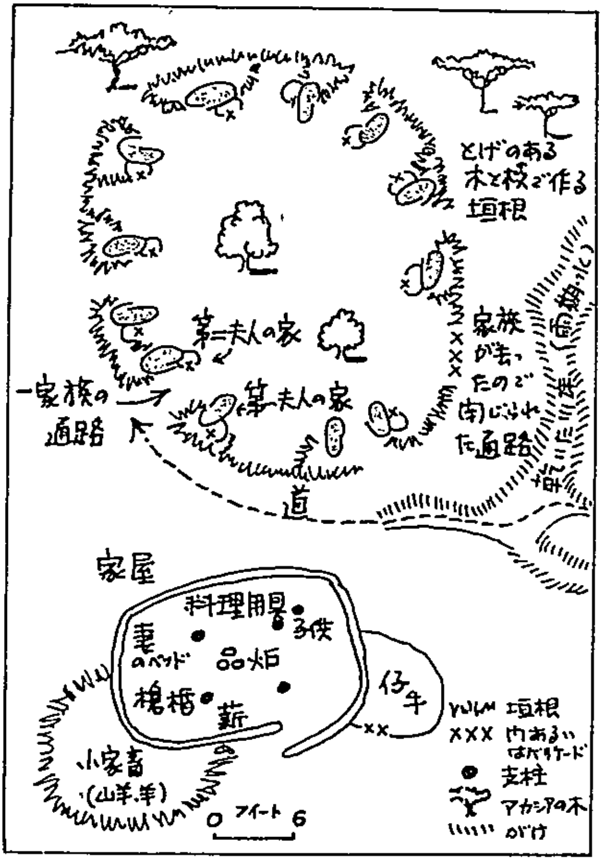
なかに，いたってほっそりとした体格の鼻筋の通った，唇のうすい人々がいる。ナイロート系の人種である。バンツー系の人々と異なって心もち色がうすい。バンーツ系部族の生活様式は，おおむね



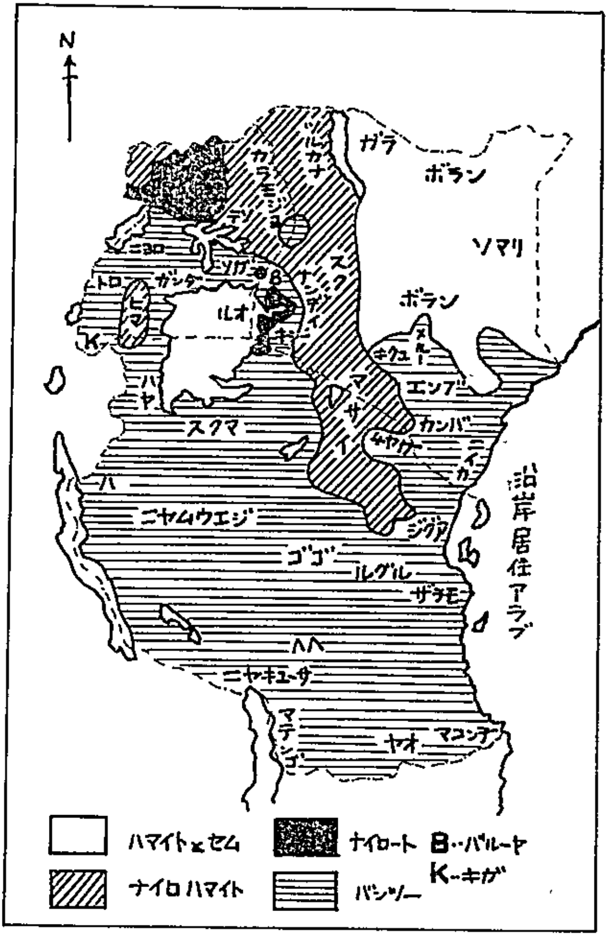
Lands & Peoples of East Africa by Hickman and Dickins p 36 から



東アフリカにおける人口密度
Lands & Peoples of East Africa p. 208 から



代表的遊牧民マサイ族の家居図
Lands & Peoples of East Africa p. 55 から



東アフリカにおける部族の分布概況
Lands & Peoples of East Africa p. 131 から

農耕（初歩的な農業）であるのにひきかえ，これらの人々の生活様式は遊牧である。

農耕が至って，初歩的であるように遊牧もまた，蒙古，中近東の遊牧民に比べるならば，技術的には劣っていると言われる。

注目されるのは，その社会組織である。綿密な研究が，特に英国において為され，いろいろと詳しい報告の，特に多い部族である。

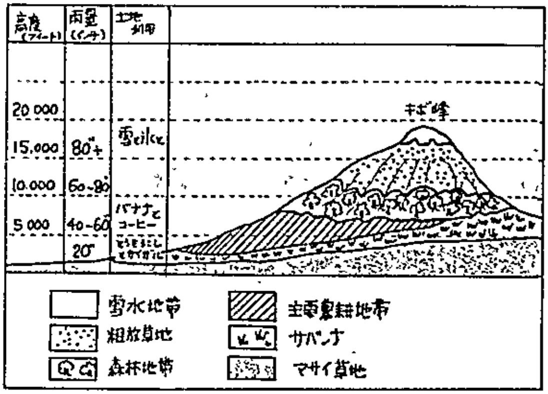
その社会組織は，近隣の，したがって東アフリカ・バンツー族社会の人々に影響を及ぼした。年齢階梯制，その中の戦士集団組織等。家畜飼育に関しての影響の強さは言うまでもない。東アフリカの各バンツー系部族の歴史は，マサイ族との抗争のあけ暮れであったと言ってもよい。

図はマサイ族の人々の家である。上中下と大別して，上流あるいは中流の上と目される人々の家である。上中下と大別する経済的基準は，牛の保有頭数である。

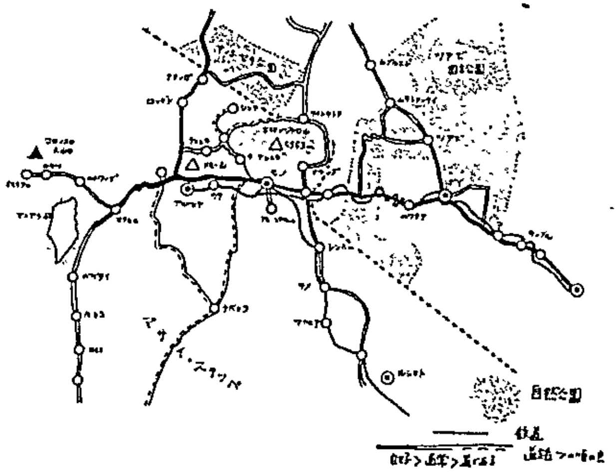
平均して150頭の牛を所有し，多い人は500頭，あるいはそれ以上に及ぶ。牛の数が多ければ，また妻の数も多い。

一見，原始的に見えるこのマサイ族も，タンザニア，ケニアでは納税者である。仔細に調べると，一部ではあるが，農業化が進行し，所有物の中には，家財の中には，先進諸国の産物があったりする。

皮相な観察の対象になりがちな部族であるが，その社会組織，生活体系，精神文化は必ずしも軽んじられるべきではない。一言。



キリマンジャロ山における土地利用状況
Lands & Peoples of East Africa p. 142 から



キリマンジャロ山近辺の概念図

同じ東アフリカはタンザニアのキリマンジャロ山中に住むチャガ族は，東アフリカでも有数の先進農耕民である。

キリマンジャロ山の土地利用を次の図で見て欲しい。

山頂に冠する雪氷の融水を利して，チャガ族は irrigation を昔日から維持してきた。

これが，チャガ族の発展の源である。水利を生かして，1920年代にコーヒーを導入した。主食はプランテンバナナだが，そのバナナの林立するあいまに，コーヒーを栽培している。

「タンザニアでは，1960年をとってみると，コーヒー，綿花，サイザルで57.6%を占めている。」（アジア経済研究所：アフリカ経済の諸問題・貿易の商品構造，国別の輸出統計から）

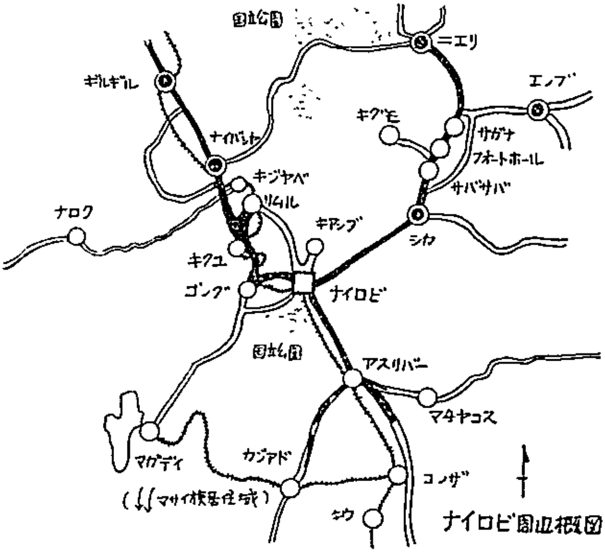
このコーヒーが，タンザニアの輸出産品のにない手である。コーヒー生産のにない手は，大多数が，白人入植者であったのだが，アフリカ人の中では，ひとり，このチャガ族だけが，生産者としてタンガニーカ独立以前から，その歴史を誇っている。カギは一つに，既述の水の利であり，さらに一つは部族の団結のよさである。協同組合を1923年から結成し，白人入植者の圧力を団結によってはねのけ，市場化も可能たらしめた。

被植民時代下のタンザニアにあって白人と競合し得た部族はチャガ族だけであったかも知れない。

部族の総人口は26万人。

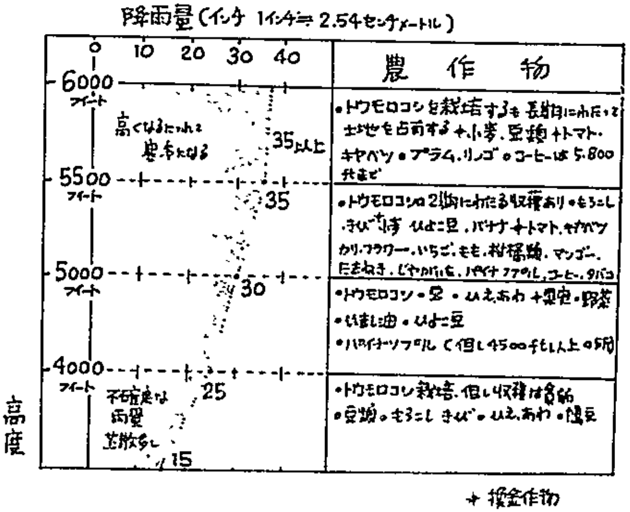
豊かな土地を背景に，比較的進んだ農耕を展開している。例外的な，エリート部族・チャガ族は，他の部族の可能性を示唆する存在ではないか，と筆者は考える。

アフリカ人はすべて遅れていて，勤労の意欲に欠けている，とは軽々しく，人の口にするところではある。だが，その認識の正しくないことを，チャガ族の存在が教える。キリマンジャロ山中を農業隊員は，一度は訪れてみるがよい。



ナイロビ周辺概念図

マチャコス近辺における収穫状況



Lands & Peoples of East ofica p 144 から

ケニアの農民の活動状況をみてみよう。ケニア国民の生業は，農業が大半である。

例えば，平均的なカンバ族の農民の場合はこうだ。

夫婦，およそ5人の子供，それに母，これが家族。

三匹の牛がいる。山羊が適当数と，鶏が数羽。

木の少ない地域なので，家は日干煉瓦作り，三つの部に分れていて，二つの部屋が寝室で，一つの部屋が居間である。三つの納屋があって，一つは換金作物を容れ，他は家族用の食料を保持するため。夫も妻も，互いにわかち合って農事に従事する。鍬とかまを使って彼らは働らく。手押車や，牛を運搬に用いたりする。

彼らの生活は多忙である。

年間の仕事は，こうだ。

1月（乾期）……できていない時は，垣根を作り，植付けに備えて新しく土地を開く。前からの耕作のすすんだ土地に種子を蒔く。草の種子を集める。

2月（乾期）……1月の仕事を完全にする。家畜を新しい囲いの中に入れ，牧場を休める。

3月（雨期の始まり）……3月の15日までには植付けの準備が完了しなければならない。雨の訪れに備えて，コーヒーにおおいをする。

肥料が散逸しないように積み上げられる。

草を溝に植える。土壌が流出しないように。バ

ナナを穴を掘って植付ける。家畜は，屋根のある囲いで飼育される。

○低地における作付

キャッサバ，サツマイモ，ひえ，あわ，鳩豆を夫々植付ける。

高地における作付

キャッサバ，サツマイモ，麦，ジャガイモ，とうもろこし，鳩豆，とうもろこし，豆類をそれぞれ植付ける。

4月………………畑の除草，豪雨でこわされた垣根の補修。草がフィートにも伸びるころ，家畜は外に連れ出される。

5月………………4月の仕事の続き。
牛肥を積み重ねる。

6月（主要な乾期）……取入れの開始。

7月………………取入れが続く。コーヒーのおおいをとりのぞく。農場のくずを二づみ，飼料に蓄える。新しい土地に牛のための囲みをつくる。

8月………………月の半ばころ，牛を囲みに入れる。
土壌の保護を続け，農作業が続く。

9月………………とうもろこしのとり入れ。とうもろこしのくきと，さとうきびの葉で牛を飼う。土地から古い作物をとり除く。

10月（小量の雨の降る季節）……小量の雨をのがさないために全ての準備が行なわれる。土地は耕やされ，月の終りまでに種子が蒔かれ，肥料が入れられる。コーヒーの根を保護するための手入れをする。雨の訪れまでになされなければならない。

牛は囲いの中に留まる。バナナが植え付けられる。

11月………………10月と同じ。

12月………………30センチの丈に草が伸びるまでは牛を囲いの中に入れておく。それから小さい牧場に追い込むのである。肥料を囲いから移す。

さて，このような小さい規模の農家でも土地を注意深く扱えば生産は増加し得るであろうことがわかる。

このような現象が，アフリカ全域に起きれば，人々の健康と物質所有は豊かに向上するだろう。

さて，説明は省略するが，ケニアの代表的なキクユ族の，農耕に関するタイム・テーブルをも紹介しておく。次表の如くになる。

キクユ族の農事の一例

	降雨 2 4 6 8 (インチ)	季節	土地における仕事	植付	収穫
1月		短い乾期	播種に備えて整地 トウモロコシをこいで家畜に		短雨期の作物の収穫 コーヒーも摘む
2月					
3月		長い雨期		・トウモロコシと豌豆を植付ける 1)トウモロコシを播く 2)豆類をトウモロコシの出芽後 3)サツマイモを	
4月					
5月			・除草 ・サツマイモに土寄せ ・とうもろこし熟す		
6月		長い乾期			豆類
7月					トウモロコシとサツマイモ
8月					
9月					
10月					
11月		短い雨期		豆類とサツマイモの植付	
12月					

キクユ族の土地における農事の一例

Lands & People of East Africa p. 154 から

モ ロ ッ コ 事 情

モロッコ，この，日本人にとって未知の国。北アフリカ地域は全般的に日本人にとって知られていない所である。

まずは常識的な事項から確認しておこう。

モロッコ国，面積450,000km² は北は地中海，西に大西洋があって，国境の一部を形成する。東に，アルジェリア，南にスペイン領サラ沙漠。

2大山脈があり，その名称，一つをリフ，一つをアトラスと言う。地図より明らかなように，地中海の海岸に沿ってリフ山地がある。地中海岸から大西洋岸にかけて，北東から南西にアトラス山脈が走っている。この二つが，たくましく，モロッコの骨組みを形成している。これはまさしく，モロッコのバックボーンなのである。これらの山地の確保する向となれば，豊かな雨量がモロッコの農業を支えているからである。モロッコは農業国で農業が国の死活を握っている現状である。ちなみに最も多いところでは年雨量1,500㎜以上に達する。

先住民族はベルベル人である。なかの大きなもの，マスムーダ族

サンハジャ族，ゼナダ族。

生業は遊牧が多い。

ベルベル人の土台の上に，アラブ人が侵入してきた。それが7世紀以後のことで，20世紀以後は，ヨーロッパ人が入ってきた。

1265年の総人口約1,310万のうちベルベル系4％，アラブ系10％，他は混血である，とされるのは，このような背景の反映である。

公用語はアラビア語とされてはいるものの，フランス語の普及度はきわめて高く，これが使えないことには公務にさしつかえるのが現状である。

旧スペイン領（北部モロッコ）ではスペイン語が君臨する。フランス語と違って全域において，ではない。

ベルベル人の各部族の言葉が現実にある。だが，部族の交流が日毎に盛んになってきた今日の情勢と，さらには部族語の表記すべき文字の欠如とがあいまってアラビア語が本格的に定着し始めた。

モロッコに定着し，生活するためには，従って，フランス語とアラビア語の知識は欠かせない。北部モロッコにあっては，スペイン語の知識もまた望ましい。

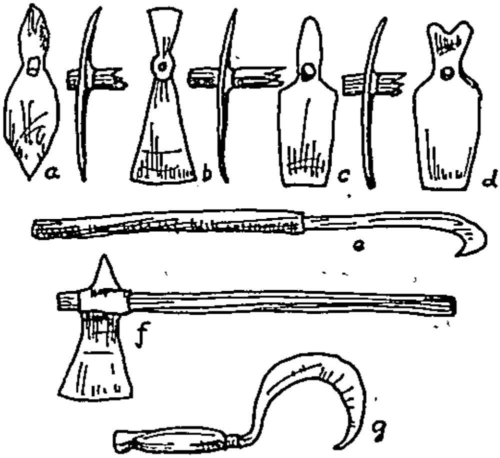
歴史的な事情と，民族成立の背景を考えるならば，その必要性は誰しもが認識することである。

隊員はとくに錯綜した言語の現状を念頭においておく必要がある。

さて，さらにここで，住民についての記述を深めよう。

種々の住民がいることは，これまでに述べた。だが，歴史上，言語上，主要な住民の一つは，ベルベル族であった。「北アフリカのベルベル族の社会は，表面的にはイスラム化されているが，アラビア語が完全には消し去ることのできなかったベルベル語とともに彼らに固有の生活様式を保ってきた。……アルジェリアやモロッコのベルベル族の小集落は，乾いた石の壁に支えられて雛段状に整備された山の斜面にあり，そこで彼らはアラブ化された民族と同様に，硬質小麦やパン小麦や大麦を栽培している。彼らが農耕に用いた道

北方モロッコの農具の数々



a，b，c，d，—耕作用具　e—なたがま　f—おの　g—かま

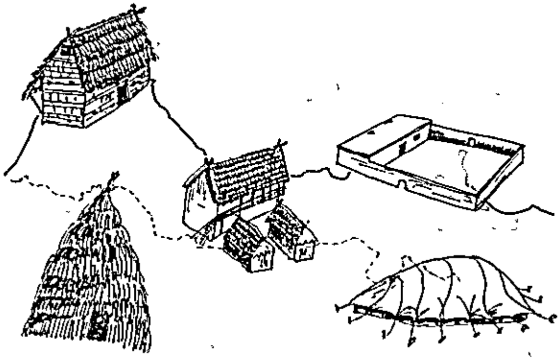
具は，犂，半円形の鎌など地中海世界のすべてに共通のものである。」

図を参照されたい。

「山羊や羊の飼育は，遊牧民・半遊牧民，定住民のいずれにおいても重要な意義をもっている。乳，オリーブ油，バターなどは穀物の粥に混ぜて食べ，祭りの日には，ひきわりにした大麦や小麦で肉饅頭を拵える。」生活様式の一つの側面は上記のようなものだ。

社会組織については，「ベルベルの国における政治組織は，部落をなしている父権的な家族または，リニエジに基いている。三ないし四の部落が一つの村をつくり，いくつかの村が自主的な一地区を形成する。中心地には共同の大きな穀物倉と市場がある……。」（以上「……」は文庫クセジュ「アフリカの民族と文化」ドニーズ・ポーム著から）

北方モロッコの民家



モロッコにおける都市居住人口の増減表　(1952～1960)

地域名	1960年census による全人口	1960年census における都市人口	1952～1960年 における人口増
マラケッシュ	1.976.969	29.6	12 %
カサブランカ	1.381.058	18.8 %	42
ラバト	1.156.475	22.6	44
アガデイール	847.923	7.0	(1)
フエズ	829.822	31.4	20
テトアン	650.850	37.0	(2) 19.5
メクネス	571.505	41.0	26
タンジール	164.455	86.0	(2)

(1) 196年の地震のため人口増なし
(2) テトアンを除いてはスペイン領モロッコからは人口が減少した

テイピカルなもので，全ての都市にあってはかならずしもこの通りではない。

北方モロッコの"衣服"文化

a—リフの若い男　b—ジバラの老年男子　c—少年　d—都市の男　e—ジバラの女性　f—サンハジヤの女　g—リフの女性　h，i—都市の女性

工業化が産業面において，さらに，それに伴って，都市化が進行し，都市居住民が増加し，生活様式が日々変化しつつあるといってもよいのだが依然として，山岳居住民が多いのも，モロッコの現実である。

「西北アフリカの硬葉樹林ステップ地域，すなわちリフ，モロッコのアトラス，アルジェリアの山地，およびチュニジアにおいても同様で，そこでは牧畜は犂農耕とともに，大きな役割を果し，降雨条件によって，規則的に家畜をともなって移動することをよぎなくされている。ここ西北アフリカでは，純粋のアルム経済とならんで，トランス・ヒューマンスもまたかなりの役割を果している。」（アルム経済とは，農民がその家畜を，彼の固定した居住地から夏のあいだ山岳の高地牧場に送り，いっぽう夏のあいだにその河谷の採草地で得た飼料（乾草）によって冬の間河谷で家畜を舎飼するという形の牧畜のこと。トランス・ヒューマンスとは，冬の舎飼のかわりに家畜を，特別な人間とともに，冬が温暖で，植生の豊富な地方に送り込む形のことである。『農業文化の起源』ヴェルトより引用）

山岳居住民はほぼ上述のような生活様式に在る住民たちである。この牧畜の形は，ヨーロッパや中近東にこそ類似すれ，いわゆる黒アフリカには見られないものである。

黒アフリカに見られない，モロッコの特色をあげればきりはないが，白アフリカ（またはアラブ・アフリカと言われる）連帯の核に

なっている回教について一言触れておこう。

「回教は挨拶や礼拝にアラビア語の句を使用する点，宗派の相違による対立が概して少ない点，地域差，民俗差を越えた連体感が形成されている点，職業貴賤観のない点，僧侶という社会階層の存在しない点等で特徴づけられよう。」先住民ベルベル族の上にアラビア人がもたらしたとも言えるのだが，回教に関してはこの通りだと考えても差支えない。そして実際には，神，天使，経典，予言者，来世，天命への信仰の"信仰の柱"と信仰の告白，礼拝，断食，救恤，巡礼の"イスラームの基"との祈念，実践はきびしく行なわれている。モロッコにおいては実践されていると考えてよい。

具体的には，金曜日の午後の礼拝，断食の実践に伴う，業務の停滞に諸君は悩まされることであろう。サハラ以南にも回教は浸透しているものの，種々の形態でくずれているし，土着の宗教と融合しているのが実状である。

回教もまた，モロッコ住民の生活様式を支えているものである。モロッコに赴むく隊員のよく心得て欲しいことである。

以上の，まったく基本的な認識の下に，次の諸図表を参考にされたい。モロッコの生産概況を示すテーブルであり，気候，生態相を探る手びきとしての諸グラフである。

第一次産業にかかっている，モロッコ国の生産の現況を読みとって欲しい。農作物のを見て，地中海圏の一端としてのモロッコの位置を読み

とって欲しい。年間を通じて，さらには日中の昼夜の寒暖の較差の大きいことを知っていただきたい。日本からモロッコに臨む場合に，この事実を知っていないことには，厳暑は予測していくものの，厳寒の期待が無いものだから，あわてて防寒衣類を調達せねばならぬようになる。いわゆる"アフリカのイメージ"（実は虚像にも似たものだが）とは異なったアフリカをモロッコに発見するであろう。アフリカは大きく，多様であることを改めて強調しておきたい。

末尾の図表は，発展途上の国としてのモロッコの一側面を知るよすがとして欲しい。モロッコに限らず，南北問題の現実の象徴的な側面を語る，入超の実相である。日本青年海外協力隊隊員に寄せられる期待は，かかる現実と無縁ではない。

モロッコ５カ年計画（1660〜64年）の投資明細

部門	公共企業	私企業	総計	割合
農業	831	1 223	2.054	312
工業	448	1.426	1.874	284
手工業	11	44	56	08
水力発電	52	38	90	1.3
鉄道橋・堤防工事	550	(¹)	550	83
都市および地方開発	709	640	1.349	20.5
社会投資	413	(¹)	413	61
行政面投資	120	(¹)	120	1.9
サービス業	8	87	94	1.5
総計	3 142	3.458	6.600	100 %

(注) 単位は100万デイラームである。１$＝5.06デイラーム

(¹)は無きに等しいか無か何れにせよ無視し得るもの

・・1961・・ Le development Industriel, Rabat

農産物生産高（モロッコ）

作物	作付面積			生産高		
	1960	1961	1962	1960	1961	1962
マカロニ小麦	1 185 000	1 160 000	1 104 000	705 800	480 600	924 600
パン小麦	457 000	396 000	384 000	300.000	153 200	322 700
大麦	1 650 000	1 548.000	1554 000	1 053.000	548 400	1 185 000
とうもろこし	479.000	432.000	450 000	287 900	180 100	349 300
もろこし類	(1)	100,000	104 960	69 600	39 800	60 917
他の穀物	44776	64 600	80 846	54 700	38 068	91 368
豆類	204 780	263 176	253 122	122 742	84 516	137 021
亜麻の実	35 000	12.607	30 152	13 700	4 290	12 903
じゃがいも	(1)	15 500	22 776	125 800	143.800	215 269
トマト	13 000	13 800	11 334	270 000	198 415	210 790
ぶどう	(1)	(1)	(1)	354 000	202.000	(1)
オリーブ	(1)	(1)	(1)	113.000	181.000	(1)
かんきつ類	(1)	(1)	(1)	439 000	436 479	505 395
オリーブ油	(1)	(1)	(1)	27 000	27 000	13.500

(1) 資料が使用に耐えないので不詳

出典・1962年 ラバト農業省調べ

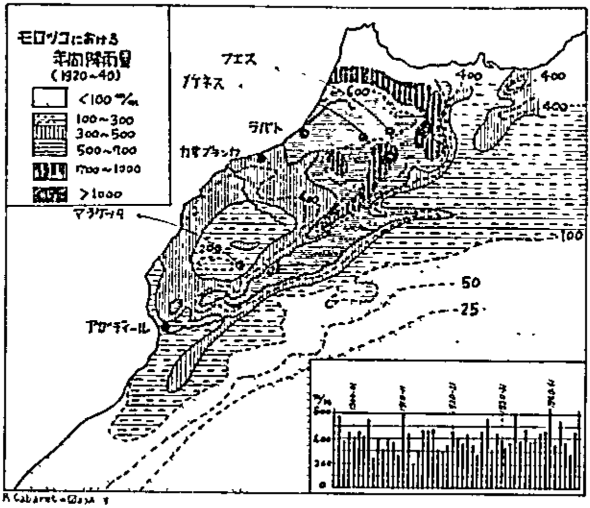
面積はヘクタール、産高は 1 metric ton (=2,204.6 pounds)

モロッコにおける国民総生産1956年（額面は十億フラン）

総生産	額	割合
水産 森林 農業	202	39 %
水力発電	8	2 〃
鉱産物	36	7 〃
工業および手工業製品	87	17 〃
建築及公共事業	33	7 〃
運送	69	10 〃
商業	90	18 〃
総計	525	100 %

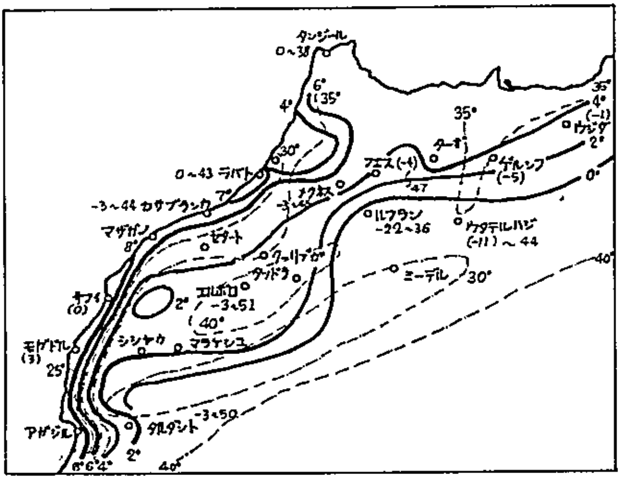
（注）350フラン＝US＄1

Source は Le Maroc autvava: 1 Rabot 1960年版 p. 156 より


モロッコにおける
年間降雨量
(1920~40)
<100 m/m
100~300
300~500
500~700
700~1000
>1000
フエス
メクネス
ラバト
カサブランカ
マラケイタ
アガディール
600
400
400
400
100
50
25
200

R. Cabaret

モロッコ気温概図

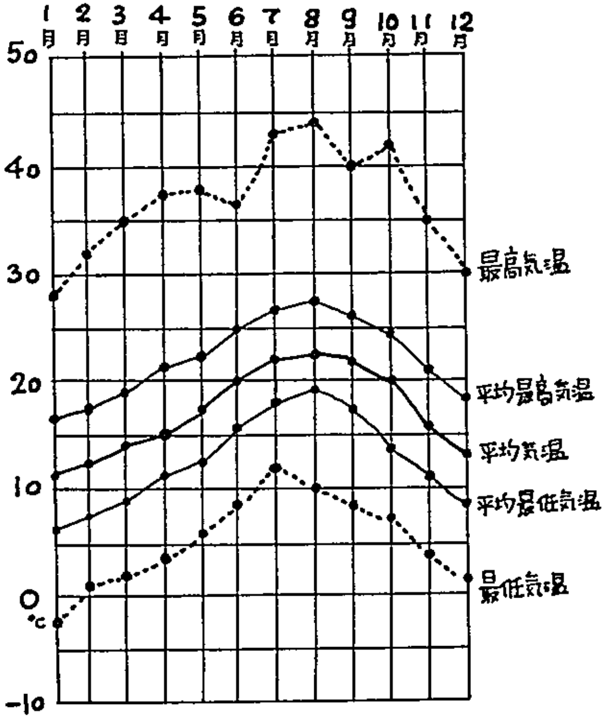


—— 冬における等温線

------ 夏における等温線

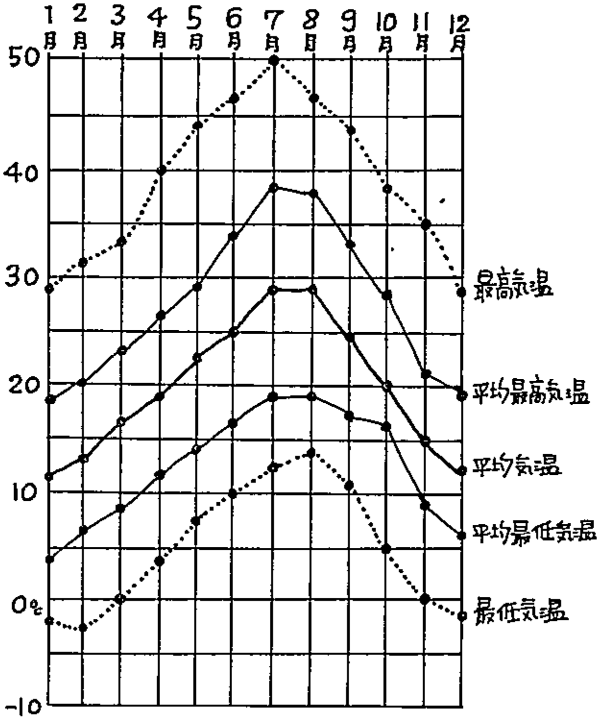
A～Bは冬と夏との最低，最高を示したもの

カサブランカにおける最高平均，最低気温



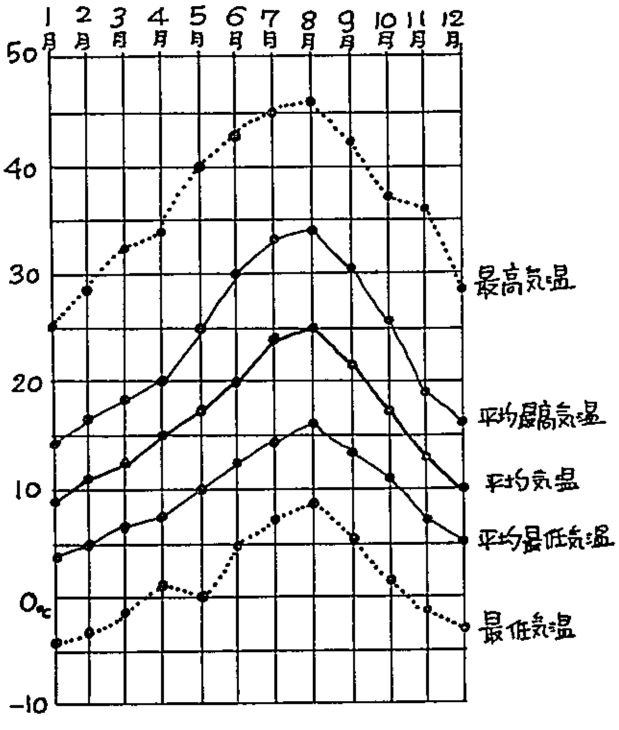
（…部は恒常的ではなくこんな記録があるという温度である）

マラケッシュにおける最高・平均・最低気温



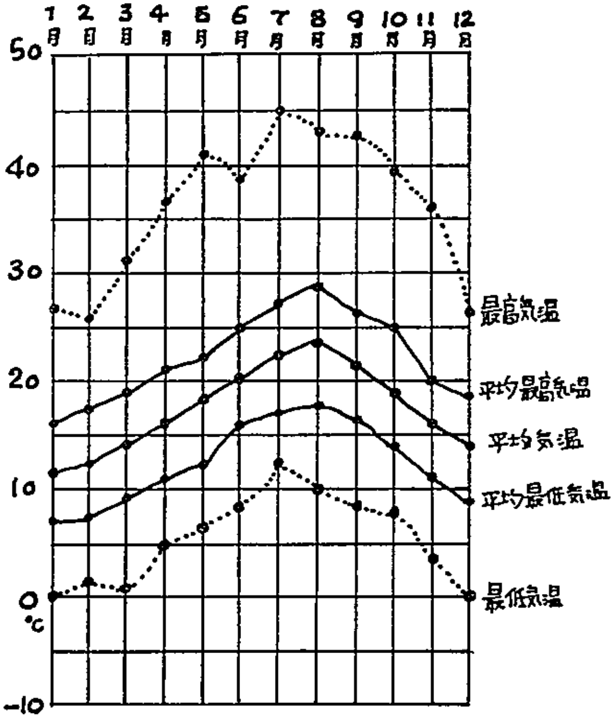
（…部は恒常的ではなくこのような記録もあるという温度である）

メクネスにおける最高・平均・最低気温

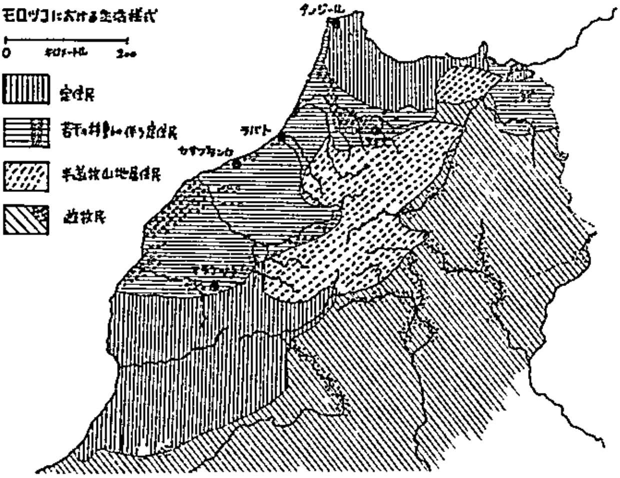


（…部は恒常的ではなくこのような記録もあるという温度である）

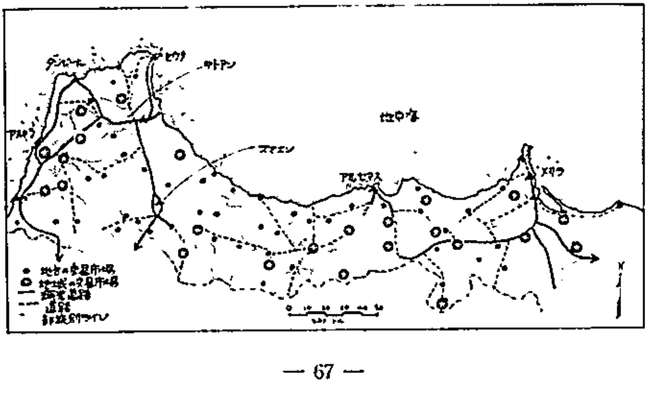
ラバトにおける最高・平均・最低気温



(…部は恒常的ではなくこんな時もあるという温度である)



北モロッコにおける部族別の交易状況



モロッコ国が米国より輸入している物品　　（1958年～61年及び

輸入物品	1958	1959	1960	1961	1962 (6ヵ月)
食料品.飲用物タバコ	22.90	12.57	34.96	106.12	89.90
ミルク	8.69	1.18	1.16	1.00	.48
パン 小麦	4.10	2.34	15.60	74.24	56.96
タバコ	2.60	2.99	5.37	4.89	1.77
小麦粉	1.03	2.85	6.60	4.54	3.56
燃料及原料(油)	32.71	35.35	64.79	54.04	37.11
ガソリン	2.24	1.33	1.09	1.10	.30
減摩剤 果実	.76	1 08	1 15	,87	.54
各種含油種子 (大豆が主)	2.57	8 38	5 57	5.73	4.20
鉱物	2 66	1.42	.99	1.22	.93
半加工鉱産物	17.67	13 27	67 78	19.92	6.69
化学製品	.59	.45	.59	.91	.43
鉄及鋼ワイヤ棒	.11	(*)	.11	(*)	(*)
チューブ及パイプ	.88	.71	.45	.27	.54
建築材料	.52	.26	.18	.10	.03
金属ワイヤー	.14	.11	.17	(*)	.02
金物	.55	45	.47	.46	.23
農機具及トラクター	14.65	5.96	3.58	2.31	2.05
工業用車のタイヤ	1.08	1.34	1.40	.91	.61
ジュート袋	.16	16	.16	.54	.87
諸手工具	.19	.16	19	.10	.04
ピストン.モーター類	4.97	3.68	7.39	3.72	2.97
圧縮ポンプ	2.67	1.39	1.28	1.26	1.12

1962年の上半期にかけて）

起重装置	.96	.60	.39	.17	.12
発掘機械	7.06	2.45	2.62	5.36	.76
鉱山用諸機械	1.26	.97	1.09	.97	.68
諸種機械	.90	1.53	2.23	.80	.39
機械工具	.73	.60	1.58	.96	.47
電動機	.58	.22	.31	.27	.19
鉄道装置	.12	(2)	(2)	(2)	(2)
工業用トラクター	1.26	.26	.18	.49	.73
工業用車輌	3.25	1.59	.42	.96	.27
車輌部品	.75	.66	(2)	(2)	.06
消耗品	25.80	17.89	26.58	23.40	17.78
薬品	.37	.16	.27	.37	.09
合成布地	.69	.45	1.65	2.51	2.16
綿布	6.31	5.76	8.65	8.36	4.60
柄物綿布	1.26	.70	1.52	.73	.42
靴下.メリヤス類	.27	.35	.18	(2)	(2)
衣類	.29	.16	.37	.43	.08
家庭用金物	(2)	.13	.14	(2)	(2)
冷蔵庫	.91	.55	.48	.29	.10
旅行用車輌	5.07	3.94	5.91	3.31	5.51
〃の部品	3.38	2.67	2.91	2.44	1.47

(1) 1958年における$1はDH4.20，1959年においては$1はDH4.32，1960～62年にかけては$1はDH5.06

(2)は無視してもよい程小量ということ

（注）単位は100オディラーム　Source は1960年，1962年の商業省，工業省，鉱山省，家内工業及び船舶通商局，ラバートの記録より。

あとがき

日本青年海外協力隊隊員候補生諸君の，現地事情認識の一助にこのハンド・ブックを作った。ずいぶんと，舌たらずな所もあり，不備な箇所がある。無いよりかはましであると，筆者は割切って，敢えて拙速を肯定した。不備は逐次修正する。隊員となって，現地で業務を展開する諸君からの報告を鶴首して待つゆえんである。

なお，これは前編である。後編には，隊員の報告書を収録したハンド・ブックを予定している。隊員と共に協力隊事務局も前進する。隊員諸君からの，きたんのない助言と注文を切望する。

1969年２月４日　　筆者記す

印刷　昭和44年２月15日
発行　昭和44年２月20日

筆　者　　谷　口　　穣
発行人　　篠　浦　公　夫

東京都渋谷区広尾４－２－24
発行所　日本青年海外協力隊事務局
Tel（400）7261（代表）

[illegible]